生花

手引の栞

附録

挿花
千筋之麓
附録之巻

一 主居家居を兼る花挿やうの事

一 他流の圖式

秘蔵口傳の證文

人に花を送りやう并草木色やう

一 花道諸事寸法

一 四季花こしらへ同飾りやうの秘事

生花千筋の麓附録

附言

東都 入江玉蟾 撰

一 此一巻ハ予他流ふしく傳しおけるものも多く人に花を教て いとまなきあるを人に對し紛らく書述当流門におくる 家々の定法をわけしめへ流々の秘事かくしきの一くしを列ね書 のこさすかつ證文傳のうつしを入れ先となり

一 書のうち口傳の證文なり本傳数々余をといへとも 名目と圖式をあらはし事もいへる故亡師 予に授るの日抑止せらる詞あるに依て師命を恐るゝの

謂なり信切を重して師恩を忘る人は何の情も無
へり心は信の一意に敵せて口授といふに似ても
一 業をよく行ひ心も正しく花を能ゆる人ハ花を知りし
者と知るべし花を練熟の人にも心の花をよく
知る人あり花を体の花を見る人も風雅なる人も必
花席にして必花を識るべし但坐配の間にして無
酒興ハせぬべし
一 花流は古人の形に少も不違我流多し先師の流を
れいかにも花を識るにしかば花門に対して穿鑿すべし
しかし吾門を尋門にしてものも見るべし

○主居客居を兼る花挿様
一 お客には先客人の方へ高くしるしてあれて挿べき
とれば客居の出口へ花をいけ主居の方へ長く枝葉を
出すべし 此挿様
連座の席中へ
礼を述る時
客居の出口へ花を生
又勝手の方へ枝葉長く
出して高く主の方へ
礼なり図を見て知べし

主居勝手ノ方

客居上坐ノ方

掛物大かたの画ハ唐絵の岩に牡丹と
一ツ二つ書いれし画に花あるによりて岩に
あしらいかよい
けかしる
能こと

木賊(トクサ)
岩盡朶(ウニシダ)
玉時雨

掛物極彩色の花鳥なり
岩に花鳥ありとも亭主の
好みつきなり
こんなと　さとりて
あやかなり
おもしろく
生ふしたる
時の一興なりけり
古人の伝へにも
あり

シヤガ　花咲ク時　胡蝶花(コテウクワ)トモ云

馬柄杓よ
座敷物

新古今集

駒とめてなほ水かはむ
山ぶきのはなのつゆそふ
井手の玉川
俊成卿

山吹に
よりくるの
紐とく
ふり
防人

籠枕花生ニ
朝顔

山紀ニ
うつくしく
一入おもしろうき

玉蟾

杼の釣花生ふ
女郎花 糸薄

七夕は
たむける
絲となり

抱雪

水くゞりの梅

さくむきぬ
人のあさく
や
みなつらん
梅の下ゆく
水の
まかれ

用捨菴

尺八の筒に

竹葉菜（ツユクサ）

玉時雨

水仙三本の
寒紀　花うき一本一紙なり

○水仙の葉をためて挿る口授

一水仙は葉の出生よろしく花弁も六つにて法数によろしく
婦人数あると祝事にも当用する也伝ふしく常に
書あらいのるし葉をためて生べし葉を出生にすれば
陰の葉八分にすべしかしれ

○残り花と見る事

一孫花といふも時ならざる花は生ぬ病なりし残り花は猪立
猪ふりの得うけ或る婦人やの花にも当用一花し
古時ならぬといへども先八十月比に咲くものし十月の異名
と小春といふて冬至の候ゟ近く一陽来復の字をも好くこ

陽を請るにあらで咲しむるは何ゝ花にもあれ祝事にも
ふくましけれ

○花葉水に盛る事

一 諸花ともにすゝ嫌ふといへども蓮河骨なとはくるしからず
蓮ハ水中より開る葉も又河骨も同じ花水際に
しく咲くも此二草の出生なれバなり

○荊蓋房足の事

一 枯葉虫喰葉折れ葉ハ陰にて忌ものなると十月より(の)
花なるをや房足の花ならば花なしぬものと出る陰の秘密
より出る花なり時節花をくらふハ法なれバ 粉瓶の事は

いけて興あり秘密よりおこる法をとなへて伝あり

○両瓶対花是ハ婚礼に用る事

一 常に生る花にあらずして婚姻の座敷にかざる生る男女赤白
ふたつの瓶に何れも花いけて生る伝ありくはしくハ本書にのべ
うるし

○金せん花は名両種ありの事

一 金盞花と金銭の花とは同じく花性似たるもの也べし

金銭花 本名 川蜀葵 午時ニ花發キ子時ニ落 故ニ 午子花ト云
毒アリ用ヘカラス

金盞花 一名 長春菊 花四季ニアリ 毒ナシ用ヘシ 花盞ノ象アリ
是人ノ知ル所ノ金セン花ナリ

ぬけ西稗なりとも毒草なりとて忌事を嫌ふへし

○蓮子花の一花ハ口伝ありとぞさるゆへ但小僧の一条

一 是ハむかし二説ありて何れも伝ありあのごとく書あらはし
たり古人俳仙柳居士の説に

梅ところ二又登人伝説ありこれにつゝき

此伝をしめくくる工案して詳ふまや知して伝ふまや名人の
なれバ有ニ扱ふ符合せる事も自然に伝りけれハとてとりて考
へし又小僧の一条となるよしなる説なり

○柳子口の梅紙扱きて挿る事

一 梅をぬきて生る格を梅柳共に伸やかなる格を生べく

なまし活を知るへし梅を扱きて生る時ハ柳子口に構
せさるとの心く伝あり

○結ひ柳の事

一 此生方ハ昔より道別の花なりとく張喬ニ詩の結
柳深より同ふ人と結ひし伝へし又石州君柳を結ひ
給ひしよりハ彼柳にあらしと未に紀柳一枝結ひあり
よ諸に長くりしと君思ひ結ぶ事ハ旅行の一枝生方其の
例ハ八たちまちしと此工夫あり一ハ常の梅紙扱きて花を
さし入結ひよハかくしく柳枝一筋を輪にすれと
締紙の格なれと悪るに向ひて結ひあけ結ひし

らし此中へは彼の家の也を以柳を一筋かして縦来るを
おしと事候ふよりこれ書載せざるものなり
○実の形と生るものゝ事
一此事は画天と生るといへども此等古人の形なし立花家
より出たるものと思ふる実の形かく生して苔しかるさる
ものなり
梅𣝾(モトキ) 二種 是梅の木の如く用之古人 薮柑子(ヤブカウジ) せんりやう かし福
是等は花をしをる物なりしかれば花咲き時候よろしく実のなると
いふゆゑに正月の飾にも用 是ゆゑに此の類を用ゆべし
○一手切と獅子口と云ハ千家に候ふるなり

一 一手切と獅子口と云古実なり利休流ある時三井寺の
山中を遊行の時水茎に河竹の段あるを見て興
しく生けられたりけるに此時より
獅子口の名残るは河竹の河骨に生ける線是れ古流
ありて獅子口といひしは善なり利休も是より以後
一手切と云ふ事あり一手切も利休始めて切
太閤へ献せられし園城寺の名あり今ある家の
秘蔵なり
○葉の有る抛花をかざりの事
一是為花茶湯とありて賞翫の事なる中に曼珠沙華

夏水仙ハ茗荷の二葉ハ冬花ちれ時葉生するなり扱ふへし

夏水仙 本名 金燈艸 葉二月比より出て四月枯花六七月咲く 花さく時葉ハなし

曼珠沙花 一名 石蒜(サン) 葉九月出翌年四月比かれて花秋の彼岸に 花ちかり扱ひ咲く其時葉ハなし

此形に花を生する時必彼の葉をそへて活る事ハ葉なきゆへなり も

生へしらぬ出生かれてなり

○秋の花の事

一夜の花遠州流にも傳ありまた我流ハ初心の者一白と黄

色ある花をつかふべからず夜の花の名有なり生形ハ掛(かけ)物に

對(たい)して口授あり是切の出来ぬやうにあらん花ハ

低(ひき)く生へし

○二重切上下の筒に本を生る事

一是ハさまざま傳あり書あらはしがたし先上に水仙椿これ合

せ生る時ハ松のつりに水仙を伸(のび)て椿をちゞむ本来諸(ちく)

草の伸(のび)るハ上の筒の傳とほし世上のとり合せなれ居伸(い)

の理をよくはある人稀なり

○二重切生方の古實

一石州家 和泉草巻ノ二ニ曰 左のとふりと書載を

二重切の筒に花入るゝ時上の重を短くやや下の重を長くや

と利休五人の弟子に尋問 利休曰ばせんさく[illegible]にたゞ入るべし

古きのごとく花を入る宗[illegible]に云文人の弟子尋利休ハ

いけ花はいつれの世よりはしまりしといふ事上の立花に
へまして今日茶道盛になりしより
茶の湯には利休かくハ古の例なりしと道安にいたり花に
いたれりてそ用る生方まてに伝しなかとも道安
よりの事もあるへし

○卓下の花の事

一 卓下の花は香爐の脚にさはらぬやうに花瓶ちいさく
生へし是古人の押へなりとよりて花器も卓下にて
小さきものを用ひて低く生へし
此段序に出すといへとも爰にてくはしく出すと

○遊君の花に赤色を嫌ふ事

一 赤き花を生るといふは時節によりつきくて生花一種
あり夏の茶わんくし花の能をなして生る事に伝あり

○人に花を送る事

一 人へ花を贈る中に枯葉 虫喰葉 虫の巣 蜘の巣なとく
ついて有へからし花あるしも花と云ところあるこそ生り
たる地実の有る花のちらさる花あり 只今さかり
なる花は送へし久しく保ちて後猶るにも送へし生人へ
遣るならハつほみ花漸二三輪も開きたるを上へし
生実の志御まちなるへし 此例を用へし

茶木の花包(つゝみ)やうの圖

○花道諸事寸法 附名所のあく

一手切花生ハ千家の極秘なり別に記しかたし
むね家にハ寸法あるものなり

一薄板の寸法なにも記すといへとも古法とのく物数寄ニ
して何れも一分二分ツゝの相違あるへし

一尺三寸五分
七寸五分
厚四分
小口蛤羽

上同
角

矢ハツ内ヲ
朱ニテヌル

一尺
丸香臺

右のごとく器をわかつといへとも大凡床の幅より内に入るを
三ツ一ト分と横に定め二ツ割一分と堅に定てよし覚ゆへし
古人の寸法に合せてのなり違あり本式あり数寄あり

同床へ置所は同十九同廿へ同なとく古法あれとも薄板を
つけるは横ニおるへし居も世れくらし おのづから古法ニ
合ふなり左右前後中央に居よく心得へし

一 水撥(みづはち)寸法 又垂撥ト書

長五尺

厚 上ニテ三分 下ニテ二分

一寸五分

穴六分

一尺七寸五分

ミゾ二分

長二尺寺一分

九寸

一寸五分

二分

三分半

又上ヲ如此シタルアリ 理方ヨシ

水撥ハ壁(かべ)床(とこ)へ掛るものにあらずして柱(はしら)つけ床にかけて
用ゆるものにて花を斜に生る則ハ紙へ斜のしるしなきやうの
心えなり なくはさらに花をまつすぐにしむ時ハ何方へも掛べし
床板ハ壁床へ垂べし 板床にハ板にかけよろしきと

一 釣瓶寸法

鉄鐶

高五寸八分

高六寸八分 口五寸八分
ソコ四寸八分
中手 八分ニ六分

又
此寸法アリ好人ニヨリ可用

○木ハ虫喰ハ外古く晒(しやれ)たる物よし 新き板ならハ今日
雨打にさらし用べし
○縄ハ蕨(わらび)縄なり 長き縄もよし 并紐(ひも)なとも用へからず
○釣瓶ハ床かけ三ツ打ハ一ツ目なへし 釣瓶ハ
床縁なりおとし掛よりの間上ハ一打目と二打目に居へし
○釣瓶ほして置ことしまる時ハ縄ハさらりて側(かたはら)に壺もなし
一ツ釣りても用 又掛花入にもあり 壺花入にも一ツ置
きかける心をかし節らせべし

一釣舟の釘も右同前なり 高さハ人立て見て座の
三ツ割ほと有へしと古法にいへとも三ツ割一割同前たるへし
よるへし

一床の中折釘は床框の下無際より三尺八寸五分
なるへし 惣中ほとへ打へし 床の大小によく擬へて
見合すへし 又柳の釘あり

又床根の柱へ打釘を花生掛と思ふ人多し 元来さるよ
ありしを出入高僧なとの招請の時輪燈を掛け袈裟
なとも掛るための釘なれとも 元来花生掛と心得る
人多き故に花を生るならしては床の外へ掛る事出ぬやうに
すへし

小笠原家礼式に婚礼の時衾敷の事を掛る釘之と見ゆれ
し

一籠花生ハ床板に居へて瓢も是に准す

一花器を活るにハよく洗ひ水気を見て生へし 竹なとも
洗ひ拭ふへし つゆにも露をおくへし

一青磁の花器ハ洗ひ拭て露を持せぬか古法也

一銅器ハ自然と汗をかく物なり

一籠瓢ハ拭ふにおよハす露を打にも及す

一焼物も備前に露を打へし

一床板に露のかゝらぬ様に拭ひとるへし

一竹ハ秋と切旬なりとも性節なとさへ花生にする割安し
其切へしと古人の傳なり 冬月竹を用ゆへし

○四季花拵(こしらへ)様持(もち)様の秘事

一 夏ハ水腐(くさり)やすし梅雨(つゆ)の時分水を替ふ不持へ様(もく)末一焼(くわり)
火ニ焼て水中へ入て花を持へしよく花(?)持し
又ハ水中ニ水ある茎を水中ニ硫黄(いわう)を入へし又酒を
入てもよし水ありとぞ

一 牡丹ハ切口を火ニて焼へし水中ニ蜜(みつ)を入てよく
花久しくもつ也

一 萩ハ水あけてよし古へ湯の中ニ浸後冷水ニ揃へしすへて
生けるに花ハ古へ湯ニ入茎(くき)を焼べし

一 海棠(かいだう)ハ切口を蘇芳(すはう)の煎葉にて包ミ生へし花久し

一 秋海棠ハ竹の花入ニ生へし竹ニ生れバ花能く保し
又茎(くき)の節(ふし)をば小刀の先ニて少しづゝ割(わり)冷水ニ
いけてよし塩揉(あをけ)んと云ふ事多切てて水ニ入生る
花葉とも持よし

一 蓮ハ切口に糸を付て緒(くく)りて切り後逆(さかさま)にして
切口へ泥(どろ)を入て生けてよくもつ也

一 河骨ハ葉茎ともニ弱(よわ)し切口へ山椒(さんせう)を割込生へし
又切口ハ熱湯(ねつゆ)へつけ後冷水ニ移(うつ)へし又茎を指(さし)のごとくひ
しさ揉ニ水の中へ入れ[illegible]文[illegible]のごとくし水ニ
[illegible]し置けば花葉よく持つものなり

の花生るゝに紅白紅花を紅時のいろなり

一蕣の花白色に咲けるを術をもちゐり花葉くと
見るて黒咲つさる花と葉よりに生つさやと塩井の
中へ銅して置黒白生れてこ時黒咲くなし

一畳紙切て石灰すり右全体水にひたしいけて
ほくとあけ貯ひらし花逆さまにつるも一枝
よれがゝに挿し置しとけて花葉ともふくん
ならさることなれるのなり

一椿の枝焼きあとを焼火らし自由になる

叟人入江玉蟾子は同郷にして乗馬を
鞭手綱にして壮年の比より医術に
ちからつくし学く傳襲多しといへども就先
花を好むこと一癖なりき享保の比池坊の
瀧川維舟翁あり此人や茶道ハ千家正統の
系譜ありて花道もよりに專しと蟾子并
まやく此翁にまみえしく其門に投ふこと
宏といへる師も其伝切を悉しく伝ふる所の
書は口受ことごとく一毛を残さず伝へて家

花道の事を含しては時に茶道を構へし
不幸短命なるは其剣を追福の一瓶といふかむ
坊より門の徒ともく艶意を失ひりして日々一瓶と
拝して時ふく今ふ至りて仕はまかる所は
好手の名あり此あらしと知れるものは醫生福田氏
立益といふ外ふし坊より高名は伝のなれ所ふし
といふは其意りと擲てそのくに門人既百余輩
中に観あり味何といふ志と同しうしく
一家の傳書を挿りせん事を希ふといふとも
再三固辞しくゆるされ何ぞ秘つき事や

あらんといふ筆を謝しくけりと企てその
門人のならさしと速て櫻木に寿をつけを
世残よすまて事になりぬ
明和四丁亥冬日
東都葛飾三橋住
甫捨菴珉雪老隠書

東都 撰者 入江玉蟾
補助 河邨珉雪

明和五戊子仲春日

書林
京都堀川錦上ル町 中川藤四郎
大坂心齋橋順慶町 柏原屋清右衛門
江戸本石町十軒店 山崎金兵衛
同本町三町目 西村源六
同室町三町目 須原屋市兵衛

左傳屬事 南陽先生挍 唐本翻刻 廿二冊
龍門先生文集 二扁 三冊
大㠯録 貝原先生著 二冊
經義折衷 金峩先生著 評朱李陽明仁齋徂徠 一冊
陸賈新語 蘭臺先生校本 一冊
王元美尺牘 一冊
易學辨疑 金峩先生著 一冊
大史華句 唐本翻刻 三冊

大明十三省圖 萬國一覧圖 二枚
歴代事跡圖 大清呂君翰訂正 中華之大綿圖 一枚
物類品隲 平賀鳩溪著 物産之書 六冊
十體千字文 篆及異體 一冊
六體千字文 寛陵先生書 一冊
濮橋碑銘 諸名家之文 筆墨本 一冊
字書淵海 筆法之書 二冊
石印集譜 彫刻刀法 二冊

抛入花の園 古人生花乃品式 三冊
生花千篇集 入花の作 入れ玉瞬 八冊
古言梯 万葉集の詞を 魚彦撰 一冊
百人一首解 栗本氏作 一冊
文栞 みやび和文の 法稀を集む 八冊
きりかく料理集 會席の料理 一冊
民間備荒録 飢饉の民を 救ふの書也 二冊
信濃地名考 吉沢好謙著 三冊

寐惚先生文集 狂詩 小本 一冊
小説土平傳 狂詩 小本 一冊
笑府 唐ノすーヽハナし 小本 一冊
唐明詩鍵 詩作ノ書 小本 一冊
大東地名箋 詩作ノ書 小本 一冊
詩學小成 詩作ノ書 四冊
入筆法帖 松花堂の 書札 二冊
常盤帖 松花堂乃 書札并詩哥 二冊

書名	註	冊数
七観音經	略縁起入	全
唐摹真本十七帖	明邢子愿珍蔵 東郊先生摹	全
揖取先生社中之画 諸名公擬禮賛詩 遊戯画帖		全
解體新書	阿蘭陀腑分之書 杉田玄伯著	五冊
同 約圖	同右	五枚
名物画譜	雪渓先生筆	二冊
市隠草堂集	安文仲著	五冊
詩學楷梯	東里先生輯	四冊
療治茶談	津田玄仙著	全
外科樞要	青木組剞子述	二冊
西遊紀行		二冊
四溟陳人詩集		三冊
郊華集		全
繪本いろは歌	春信筆	三冊
繪本庵淡乃時	北尾重政筆	三冊
誹諧名所方角集	谷素外輯	二冊
古今句鑑	谷素外子選	四冊
江戸圖鑑	御大名御席并 参勤交代附	一冊
種痘方		一冊
歐陽詢千字文		一冊
文子		三冊
翻譯萬國圖	并畧説 平賀先生著	
大成年代廣記		一枚
滝本書札		三冊
向風艸		二冊
今日歌集	望雲 狂哥	一冊
四聲韻選		二冊
古詩絶句		一冊